AMCoR
Asahikawa Medical University Repository http://amcor.asahikawa-med.ac.jp/

卒業研究抄録集(看護学科)(202 .12)令和 年度:

ف نمی

ڑ, ب ی

女子大学生における子宮頸がんに関する意識・情報源の調査と受診行動を高めるための具体策

阿部嬉乃　今井栞菜
（指導：石川洋子）

緒言

子宮頸がんの罹患率は20代後半から5.2%、30代前半には18.1%と罹患率が上昇しており[1]、20代からの予防・早期発見が非常に重要である。しかし平成28年の20代の子宮頸がん検診受診率は26.5%と低い値を示しており[2]、受診行動へと繋がっていない。また平成24年の子宮頸がんに関する情報源では、テレビ・ラジオ、家族・友人の順に多い[3]が、令和2年の20代の主なメディアの平均利用時間(平日)はインターネットが255.4分、テレビ102.6分、ラジオ4.0分となっている[4]ことから、大学生が日々目にするメディアは変容しており子宮頸がんに関する情報源にも違いが生じている。そこで本研究は20代女子大学生を対象に「インターネット上で健康情報を検索、内容評価、得た健康情報を自分の健康問題解決のために活用する能力」[5]であるeヘルスリテラシーと、利用する情報源を明らかにすることで、対象に合わせた受診行動を高める具体的な方法を提案する。

研究対象：C大学看護学科第2～4学年女子学生180名

データ収集方法：調査はGoogleフォームを用いた無記名オンラインアンケートを作成し、令和3年8月25日から9月6日に研究対象者に「アンケート調査依頼」を記述したメールを、C大学メールシステムを用いて送信した。

調査内容：質問項目は1.eHealth Literacy Scale(eHEALS)日本語版(8項目)[5]2.普段の情報源 3.子宮頸がんに関する情報源 4.子宮頸がんに関して希望する情報源とその理由 5.子宮頸がんに関して知りたい情報

データの分析方法：eHealth Literacy Scale(eHEALS)日本語版の各項目について「全くそう思わない」から「かなりそう思う」までの5件法で回答を求めた。8項目の合計得点を算出し(最低8点、最高40点)、得点が高いほどeヘルスリテラシーが高いと評価した。この尺度得点を基に対象者を高値群(24点以上)と低値群(24点未満)に分け[5]、質問項目2.～5.との関連について検討した。

倫理的配慮：新型コロナウイルス感染拡大防止の観点から、調査用紙を直接配布せずwebアンケートを使用した。アンケートは全て無記名とし個人が特定できないようにした。対象者に対し、アンケートの冒頭で研究目的、方法、倫理的配慮、匿名性の保証、目的外使用はしないこと、データの保管と破棄、回答送信をもって本研究への同意とすることを記載した。

結果

アンケートの回収率は35%(63名)、有効率は100%であった。

eヘルスリテラシーについて

尺度得点の平均値は24.6点、標準偏差は5.96点、中央値は25点で、高値群41人(65.1%)、低値群22人(36.7%)であった。

普段の情報源と子宮頸がんに関する情報源について

普段の情報源ではSNSが85.7%、ニュース・情報ウェブサイト82.5%の順に多く選択された。子宮頸がんに関する情報源では家族69.8%、学校の講義65.1%、ニュース・情報ウェブサイト38.1%であった。(表1)

子宮頸がんに関して希望する情報源とその理由について

高値群、低値群ともに最も多く選択された情報源は、ニュース・情報ウェブサイト(高値群70.7%、低値群72.7%)、次いで学校の講義(高値群41.4%、低値群45.5%)であった。

ニュース・情報ウェブサイトに関して、【手軽・身近である】を理由として挙げる人が最も多かった。【複数のツールを比較する】を記載した人は高値群のみであった。学校の講義を選択した人の理由として多いのは【信頼できる】【正確である】であった。(表1,2)

子宮頸がんに関して知りたい情報について

高値群では、検診方法・精度(80.5%)、費用(78.0%)、低値群では、症状(72.7%)、推奨年齢(63.6%)の順に多く選択された。(表3)

表1　普段の情報源・子宮頸がんの情報源・子宮頸がんの希望する情報源の比較(%、複数回答)

選択項目	普段	子宮頸がん	子宮頸がんの希望する情報源		
			全体	高値群	低値群
NHKテレビ(ニュース・情報番組など)	27.0	20.6	22.2	22.0	22.7
民放テレビ(ニュース・ワイドショー・情報番組)	54.0	36.5	22.2	24.4	18.2
ニュース・情報ウェブサイト(インターネット)	82.5	38.1	71.4	70.7	72.7
ラジオ	4.8	1.6	0.0	0.0	0.0
メールマガジン	3.2	0.0	0.0	0.0	0.0
雑誌・週刊誌	3.2	1.6	1.6	2.4	0.0
SNS(Facebook・Twitter・Instagramなど)	85.7	22.2	27.0	31.7	18.2
書籍(新聞・雑誌以外)	14.3	1.6	15.9	14.6	18.2
フリーペーパー	1.6	3.2	3.2	4.9	0.0
新聞	4.8	4.8	15.9	19.5	9.1
広告	(項目なし)	14.3	3.2	2.4	4.5
学校の講義	(項目なし)	65.1	42.9	41.5	45.5
家族	(項目なし)	69.8	(項目なし)	(項目なし)	(項目なし)
友人	(項目なし)	12.7	(項目なし)	(項目なし)	(項目なし)
その他自由記載「会話」	1.6	(項目なし)	(項目なし)	(項目なし)	(項目なし)
その他自由記載「かかりつけ医」	(項目なし)	1.6	1.6	2.4	0.0

表2　子宮頸がんに関して希望する情報源の理由(%、複数回答)

自由記載のカテゴリ	ニュース・情報ウェブサイト			講義
	全体	高値群	低値群	
信頼できる	31.7	21.4	53.8	54.2
手軽・身近である	48.8	46.4	53.8	20.8
正確である	14.6	17.9	7.7	25.0
複数のツールを比較する	9.8	14.3	0.0	4.2
SNSは信頼できない	2.4	3.6	0.0	4.2
多くの情報が掲載されている	4.9	3.6	7.7	4.2
活用できる情報がある	2.4	3.6	0.0	4.2
自身で情報の質を判断できる	4.9	3.6	7.7	0.0
他の人の意見を知りたい	2.4	3.6	0.0	0.0
最新の情報である	0.0	0.0	0.0	4.2
納得できる情報	0.0	0.0	0.0	4.2

表3　高値群・低値群の知りたい情報の比較(%、複数回答)

選択項目	高値群	低値群
原因	46.3	50.0
感染経路	34.1	36.4
好発年齢	61.0	45.5
死亡率・罹患率	65.9	59.1
症状	68.3	72.7
5年相対生存率	34.1	27.3
検診方法・精度	80.5	59.1
費用	78.0	59.1
推奨年齢	65.9	63.6
受診場所	53.7	54.5
その他自由記載「遺伝性があるか」	0.0	4.5

考察

1. e ヘルスリテラシーについて

20 歳以上を対象にした先行研究[3]では、尺度得点の平均値は 23.5 点、中央値は 24 点であった。先行研究と比較すると、本研究の平均値と中央値はわずかに高いものの大差はなかった。得点に差があり高値群と低値群に分かれていることについては、情報収集に関して自信がある人が多い一方で、自信がない人も存在するためと考える。

2. 普段の情報源と子宮頸がんに関する情報源との比較

普段の情報源として SNS とニュース・情報ウェブサイトが 80%以上となっており、これは平成 29 年の 20 代のスマートフォン個人保有率が 94.5%であり[6]、SNS やニュース・情報ウェブサイトを使った情報収集をしやすい状況にあるためと考える。

一方、子宮頸がんに関する情報源では家族、学校の講義の順に多くなっている。最も多く選択された家族については、身近な存在かつ情報を受け入れやすい存在であることや、自ら調べるのではなく家族からの情報を頼りにする受け身の姿勢が表れていると考える。次いで選択された学校の講義について、本研究では医療系大学の女子学生を対象としているため、講義を受けることで子宮頸がんに関する専門的な知識を得やすい環境にあることが要因と考えられる。以上のことより、普段の情報源からは子宮頸がんに関する情報を自ら収集しようとする環境にないことや、子宮頸がんに関する情報について受け身な情報収集になっている等が考えられる。

3. 子宮頸がんに関して希望する情報源について

最も多く選択されたニュース・情報ウェブサイトは、子宮頸がんに関する現在の情報源として 38.1%の人が選択する一方、今後の希望する情報源として 71.4%の人が選択していた。このことからニュース・情報ウェブサイトでの情報収集の需要が高く、情報源として効果的であると考える。

次いで選択された学校の講義について、子宮頸がんに関して熟知している教員から講義を受けられる環境にあることから信頼や正確性を感じ、希望する情報源として多く選択されたと考える。

4. 子宮頸がんに関して知りたい情報について

知りたい情報について高値群と低値群に差がみられた。高値群の人ほど検診受診に関連する情報を得たいと考えており、費用や検診方法等の地域によって異なる具体的で活用できる情報に需要がある。一方低値群は、症状や推奨年齢等の一般的な情報を得たいと考えている。

5. 受診行動を高める具体的な方法について

対象者の e ヘルスリテラシーに差があるため、能力に合わせた方法が求められる。希望する情報源としてニュース・情報ウェブサイトの需要が高いことからウェブサイトを作成し、普段の情報源として最も多く選択された SNS に広告をつけることで情報収集に受け身の対象者に対しても目に留まるよう働きかける。高値群は複数のツールから情報収集を行うことができるのに対し、低値群は目に入れた情報で完結してしまう傾向がある。したがって低値群であっても情報収集がしやすいよう SNS の広告にウェブサイトへと繋がるリンクを貼ることや、ウェブサイトの閲覧で対象者が知りたい情報を獲得できるよう幅広い内容を掲載することで、少ない労力で情報収集ができるようにする。希望する情報源の理由として情報に信頼と正確性を求める意見が多いことから、がん検診推進事業を行う厚生労働省や病院、地方自治体といった機関からの情報提供を積極的に勧める。

希望する情報源として次いで選択された学校の講義について、対象者が信頼や正確性を強く感じている講義の中で知りたい情報を提供することは効果的な知識獲得の場となることが期待できる。提供する情報については、低値群が全体の 36.7%を占めているため、低値群が求める一般的な情報とする。対して高値群は一般的な情報から発展した実際に活用できる情報を求めているため、それらの情報も講義内で提供される必要がある。また対象者の住む地域の検診に関する情報(検診にかかる費用や受診場所等)を提供することで、受け身である対象者の当事者意識を高め、受診行動へと繋げることが重要である。

結論

1. e ヘルスリテラシーの得点には差があった。
2. 普段の情報源と子宮頸がんの情報源では違いがあり、希望する情報源としてニュース・情報ウェブサイトと講義が多く選択された。
3. 子宮頸がんに関して知りたい情報は、低値群は一般的な情報、高値群は具体的で活用できる情報である。
4. 受診行動を高める具体的な方法として、ニュース・情報ウェブサイトと学校の講義を用いた情報提供を行い、受け身傾向の強い低値群でも情報を獲得できるようにする。

研究の限界

本研究は対象者を C 大学医学部看護学科女子大学生に限定しており、結果の一般化には限界があるため、今後は対象者を拡大して検討していく必要がある。

謝辞

本研究にご理解・ご協力いただきました看護学生の皆様に深く感謝申し上げます。

引用・参考文献

1)国立がん研究センター:全国がん罹患データ,https://ganjoho.jp/reg_stat/statistics/data/dl/index.html#a14(2021 年 7 月 12 日閲覧)

2)厚生労働省:平成 28 年国民生活基礎調査,https://www.mhlw.go.jp/toukei/saikin/hw/k-tyosa/k-tyosa16/dl/06.pdf(2021 年 9 月 24 日閲覧)

3)中村朋子,佐々木綾子(2020):子宮頸がんおよび検診に関する 20 歳代女性の意識と受診行動の文献レビュー,母性衛生 60(4),683―690.

4)総務省:令和元年度情報通信メディアの利用時間と情報行動に関する調査報告書,https://www.soumu.go.jp/main_content/000765258.pdf (2021 年 7 月 15 日閲覧)

5)光武誠吾,柴田愛,石井香織,他(2011):eHealth Literacy Scale(eHEALS)日本語版の開発,日本公衛誌 58(5),361-370.

6)総務省:平成 29 年度版 通信利用動向調査, https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/ja/h30/html/nd142110.html(2021 年 11 月 1 日閲覧)